

第48回「ハートミーティング」意見交換の内容について

京都市福祉職自主研究会

★参加メンバーからの主な声

- 福祉職としての向上心はあるものの、専門性を業務に活かしているのか、また、今後職場や市民の方にどう影響を与えていけるか悩んでいたが、市長の話をお聞きし、専門職の意義を改めて考え直す事ができた。
- 市長のこれまでの経験や市政に対する想いをお聞きし、身が引き締まる思いを抱いた一方、気さくな人柄に触れる事ができ、大変有意義な時間となった。
- 福祉職は、専門職として能力を発揮するだけではなく、総合職として機能する必要があるという話が印象的であった。専門性をもって業務に励む一方、自らの専門性を活かすための土俵を作ることも大事な仕事だということを聞き、今後の福祉職に求められていることを知ることができた。
- 胆識を磨き、同じ職場で働く行政職の方とも連携していくことで、市民サービス向上へとつなげるとともに、様々な職場で経験を積み、幅広い視野で物事を捉えられる福祉職となれるように自分を磨いていきたい。
- どの職場に行っても「福祉職を採用してよかった。」「福祉職がいると職場の雰囲気がいい。」と言ってもらえるような職員になれるように頑張っていきたい。
- 福祉職として市政に貢献し、10年、20年経った後に、「京都の福祉が変わった。」と市民の方に実感していただけるような取組を地道に積み重ねていきたい。
- 福祉行政は、市においても国全体においても大きなテーマだと思うが、福祉という枠だけでなく、そこから派生し、つながっていく行政全体にも目を向けていく姿勢の必要性を強く実感した。

★市長からのコメント

- 福祉職は総合職である。作られた土俵の上で仕事をするのではなく、土俵そのものを作っていくのも福祉職の皆さんの仕事である。その専門性を活かし、予算や政策の企画立案等にもどんどん関わってほしい。
- 愚痴を磨けば課題になり、課題を磨けば政策となる。例え最初は愚痴であっても、それをしっかりとメンバーや職場の人と磨き上げてほしい。
- 学識、見識も大事だが、最も重要なのは胆識である。相手に対する説得力を身に付け、周りの人間を変えていけるようなムードメーカーとなり、やがて困難な課題に挑戦するリーダーシップを発揮できる人材となることを期待したい。
- 福祉行政は、施策を提供すればいいというものではない。自立を支援し社会参加を促していくためには、人に寄り添うことが何より大切である。一人ひとりが人間力に磨きをかけてほしい。